

## 続「子、親を選べず」終章



真之介君は、泊りがけの仕事でお父さんが明日の夕方に戻ってくる迄、丸一日時間があつたので、何故お父さんが手術をした後に、それ迄と180度「性格」が変わってしまったのかをあれこれ想像してみました。

「三途の川を一旦渡って、そこからこの世への戻り際に閻魔様から何か教わってきたんやろうか？」

「それとも手術の時に、首回りの脳に繋がる神経のどこかが変わって、性格迄変わってしもうたんやろうか？」  
「等など。」

しかし、翌日の夕方お父さんが帰ってきてした、続きに出てきたオチは、真之介君の予想した三面記事のネタばらし的な解説とは全然違っていました。

「要するに、麻酔を打たれたら後は何も分らん、言うことや。手術をしているのは勿論、生前の行いに対する、褒め言葉も聞こえん代わりに、悪口も聞こえん。赤っ恥への嘲笑も聞こえんのや。なあんだ、死んだらこうなるだけなんや。何も聞こえんのや。ほなら、先を怖れて萎縮すうは愚の骨頂」

「・・・」  
「しやったら、悪口なんぞ、気にする必要はない、思い切り自分のやりたい事をやった者勝ち、恥のかき得や、思った。言いたい奴にはいわせとけ。あの世に行つて迄聞こえる事は、ないさか、気にせんでええ、て」

「・・・」  
「さらにさらさら、会社の型に自分を縮こめて、無理矢理自分を当てはめる必要もなからう。窮屈なだけやし。ほなら、いっそ、自分で型を作ればええのと、ちゃうか？ いやいや、型も造らんで、ええかもしれん。型いう固体ではのうて、液体か気体でええのかもしれない。」

こうなると、会社の看板の庇護塀の外に出て、どうしても、一度は、自分の力を試しよう  
なつたしもたんや。

それで、会社辞めて今の商売始めたんや」

「ふうん。ふうん」

「ただな、やりたい事やっても人に迷惑かけたら、あかんけど、自分のやりたい  
事やれば、人に迷惑かけん訳がない。どうしたって人に迷惑をかけてまう。そねえな時は、  
素直にごめんさい、といえばええ。それでも許してくれへん、やったら、又一から別の方  
法を考えて、今一度始めればええだっけや。二度でも三度でも、百回でもええねやで。いけ  
るところまで行けばええだけ、出来る回数だけやればええだけやねん。それだけの話やねん  
え」

「おとうて、ほんまはアホ、ちゃうねんなあ」

「なんやの、それ。口の利き方に、氣いつけや」

「苦しゅうない、苦しゅうない」

「近う寄れ、つてか？何やの、真之介。己はお代官様かいな」

最後は冗談で誤魔化しましたが、真之介君はお父さんの話にちよつと感動していまし  
た。それが恥かしかつたので、冗談で誤魔化したのです。

しかし、真之介君は、話を聞いて今迄のもやもやが、何か吹っ切れた様な気がしました。

「人目なんぞ気にせず、したい事を素直にすればええだけなんや、なつ。それだけ分れば御  
の字や。」

ほんなら、今日から、いってこましたるかあ」

と笑顔で呟きました。